

2021新年
メッセージ

希望を抱き、新たな未来に

「確かに未来はある/あなたの希望が断たれることはない」(箴言23:18)



総会長 趙永哲 (大阪北部教会)

2021年希望の新年を迎え、在日大韓基督教会 (KCCJ) に連なる全ての教会と信徒一人一人の上に神さまの御恵みと祝福、平和が豊かに与えられますことをお祈り申し上げます。

2020年はコロナ禍のため全世界が様々な苦しみの中で、新年を迎えたにも関わらず、未だ収束の糸口が見えない状況です。このような状況の中、私たちクリスチャンはどのような姿勢で、新年を迎えるべきでしょうか？

私たちが信じている神様は私たちが苦しい時、慰めて下さるお方であり、絶望の中であっても希望を与えて下さるお方です。それ故、私たちには未来が保障されていると言えるでしょう。今日の聖書箇所は新年を迎える私たちに慰めと力となる御言葉です。「確かに未来はある/あなたの希望が断たれることはない」

それでは、今日の聖書箇所は新年を迎えた私たちにどのような慰めと希望を与え、未来を約束しているのでしょうか？

1. まず、神さまはどのような状況に置かれても私たちに慰め、守って下さるお方であることを知るべきです。

私たちが希望を抱き、新たな未来に向けて行くためには、まず神さまの慰めが必要です。聖書全体を通して神様はいつも私たちに慰めて下さるお方であることが分かります。神さまは預言者を通して「わたし、わたしこそ神、あなたたちを慰めるもの」(イザヤ51:12)と言われ、特に御言葉を通して苦難と絶望の中にある私たちに慰めて下さいます。「あなたの仰せはわたしに命を得させるでしょう。苦しみの中でもそれに力づけられます。」(詩篇119:50)。ですから、私たちは与えられた現実と苦難の中で、悲しんだり、絶望するのではなく、むしろ神様が与えて下さる慰めと守りを体験すべきでしょう。まさに、このような神さまの慰めと守りを通して私たちは希望の光と未来を夢見ることが出来るのです。

2. 次に、新年を迎え、私たちは希望の神さまを体験すべきでしょう。

聖書箇所の中で「あなたの希望が断たれることはない。」と記されています。私たちが全能なる神さまを創造主として信じている以上、私たちの希望が断たれることはありません。なぜなら、その御方は希望の神さまであるからです。使徒パウロはイザヤの預言を引用しながら、次のように祈っています。「希望の源である神が、信仰によって得られるあらゆる喜びと平和とであなたがたを満たし、聖霊の力によって希望に満ちあふれさせてくださるように。」(ローマ15:13)。私た

ちの現実には絶望と苦難の連続ですが、神さまが私たちと共にいて下されば、絶望は希望に変えられる、ということです。コロナ禍の中で、私たちは人間の限界を感じており、時には絶望的な現実と直面します。しかし、宇宙万物を創造された神さまが私たちと共にいて下さる限り、私たちは絶望する必要がありません。なぜなら、私たちが信じている神さまは希望の源であるからです。私たちが新しい年を迎えながら、このような希望の神さまを体験すべきでしょう。

3. 最後に、神さまが私たちと共にいて下されば、必ず明るい未来があることを知るべきです。

聖書箇所「確かに未来はある。」イスラエルの民はこの世の他民族と比べると、長い間暗闇と苦難の歴史の中にありました。それに関わらず、彼らは苦難と暗闇の歴史を乗り越えました。それは神さまと共にいて下さるインマヌエルの信仰と彼らに未来を与えて下さるといふ神さまの約束を信じていたからです。涙の預言者エレミヤは捕虜生活をしていたイスラエルの民に向けて次のような神さまの約束を宣言します。「わたしは、あなたたちのために立てた計画をよく心に留めている、と主は言われる。それは平和の計画であって、災いの計画ではない。将来と希望を与えるものである。」(エレミヤ29:11)。当時、捕虜として連れ去られ、生活していたイスラエルの民は未来が見えないほど苦しい状況であったでしょう。今日もコロナ禍を始め多くの苦難のために希望が見えない暗闇のような道を通っていると考えている方々も多いでしょう。しかし、私たちが確かに知るべきことは、神さまと共にいて下されば、必ず明るい未来がある、ということです。

愛する在日大韓基督教会に属する信徒の皆さん！

暗いトンネルのような道を通っている私たちに何よりも必要なのは、神さまが与えて下さる希望を抱き、新たな未来に向けて力強く前進することです。既に古いものは過ぎ去り、私たちは神さまが約束して下さった新たな未来を待ち望むべきでしょう。

どうか、今年1年の間も、まだまだ厳しい現実が続くと予想されますが、神さまが私たちに約束して下さった希望を抱き、新たな未来に向けて力強く前進することによって、神さまが私たちのために備えて下さった素晴らしい御恵みと祝福を体験して行く私たち一人一人の今年1年間の信仰の歩みでありますことを切に願いつつ、お祈り致します。

ルツ結婚相談所

在日韓国人・帰化人、結婚・再婚を望んでいる人へ
年齢 23歳～70歳まで、北海道から九州まで

親身になってご成婚までねばり強くお世話を
させていただきます。お気軽にお電話ください。

090-3429-9707 代表 崔貞淑

豊かな味、豊かな心。



妻家房

SAIKABO

代表取締役 吳永錫 (東京希望キリスト教会 長老)

四谷本店: 東京都新宿区四谷3-10-25 Tel. 03-3354-0100

2021年を迎えた新任宣教師たちのメッセージ

東京希望キリスト教会 <具滋佑 牧師>

2019年5月26日委任



大韓イエス教長老会(高神)から宣教師として派遣され、東京希望キリスト教会にて牧会を開始して2年が経ちました。私が来てから1年余りで新型コロナウイルスの感染が広がり、内外に制約を受け、さらに慎重を要する事態になっています。教会の状況としては、3ヶ月の間は非対面で礼拝を捧げ、今は午前1部(日)、2部(韓)、午後(3部)に分けて礼拝を行っています。

平日は早天祈祷会と水曜聖書勉強の時をもっています。日本宣教について足りない部分があり、学ぶ姿勢で取り組んでいます。働きのキーポイントはまず、教会が宣教的な環境に置かれ、教会の聖書の正統性を確保しつつ、伝統的教会としての姿と靈性を回復することです。もう一つは、教会の宣教的機能が活性化されることです。日本宣教の拠点であり、中心となる教会として完成されることが最優先課題です。もちろん、すでに教会内では日本の人たちのための礼拝がささげられ、交わりもあります。在日と日本人が一体感を持つ共同体として形成されることと、さらには教会内に日本人コミュニティーを形成して、日本の福音化のための基礎を準備しているところです。

日本社会に福音を効率的に伝えようとするには、日本の人たちから始められなければならないと考えます。日本の福音的環境は厳しいですが、すでに主のご計画の中にあることを体験しています。

教団という囲いは、宣教の働きの足りない部分を補い、支えてくれる柱であり感謝しています。日本宣教のためにいつも一生懸命に学び、仕えることができますように祈ります。

下関教会 <金成彦 牧師>

2019年5月19日委任式



私は、西新井教会と船橋教会で宣教師として牧会された金鍾武牧師の息子として日本で教育を受け、神学の勉強は韓国で受けて牧師になり、韓国基督長老会から宣教師として派遣され、下関に定住し3年が経ちました。ここ下関教会に仕えるようになってから、韓日の近代史と政治問題に対して多くの関心を持って学ぶ時間を頂いたと思います。また、同胞たちの生き方、人生、そして置かれた現実を見つめながら、低き場所に臨まれたイエスキリストの愛がどの様なものであったかに対しても学び、特に自分に対して振り返る時間を持つことが出来たと思います。

去年2020年は、コロナによって私達の日常に大きな変化が訪れました。特に韓日間の交流が完全に絶たれてしまい、教会と共に信徒達の個人的な生活にも大きな変化が訪れました。そんな中、私自身も当時里帰りをしていた家族たちと6か月間会えなくなったりもしました。これからもコロナによる日常の変化はしばらく続くと思われていますが、それでも全てを善なる道へと導かれる主の御業が共にされると信頼しております。

下関教会は今年93周年を迎えます。長い歴史の中、本当に多くの出来事に出会い、以前より規模は小さくなりましたが、小さき者を大きくさせる主の御業を信じ信頼する中、互いに仕え、より愛し合う教会に改まる為にお祈りしております。これからも下関教会が、主が与えてくださった使命をしっかりと担う信実な教会になれるよう、多くのお祈りと関心を宜しくお願い致します。

大阪教会 <金伸禹 牧師>

2019年5月12日、副牧師就任



私ども5人の家族は2018年5月に、大韓イエス教長老会(統合)派遣の宣教師として来日し、日本に来て2年8ヶ月になりました。宣教に対して大きな期待と使命感を持って、大阪に到着したにもかかわらず、私の家族はインフルエンザをはじめ、台風や地震、日韓関係の悪化、そしてコロナのパンデミックまで、今まで一度も経験したことのないものを短期間で経験しました。宣教地が容易ではないだろうとはある程度考えていましたが、実際に派遣されて見ると、主の恵みがなければ何もできない存在であることを実感しています。しかし、真実の神は、このような困難な時期の中でもYMCA日本語学院で日本語の勉強をすることができるように導いてくださり、私を大阪教会の副牧師として、妻を讚美によって仕えることを許してくださいました。三人の子供たちも小学校に入学して、友達ができて日本語も早く習得することができるようにしてくださいました。

この記事を書くために、日本で過ぎた時間を振り返ってみると、仕えるために来た大阪教会で、むしろ、担任牧師と信徒の方々によって助けられ、主の大なる恵みの中で過ごしてきたと告白します。今後どのように導かれるか分かりませんが、過去のすべてのものを真実に導いていただいた神を信頼し、一歩ずつ導かれ、歩いていこうと思います。取るに足りない私と家族のために祈ってくださいますようお願いいたします。

あちらこちらから聞こえてくる苦しみ、不安、先の見えない暗い時代を生きていますが、私たちはイエスの中で生きていく存在であって、今日も希望が与えられることを信じています。今も変わらずこの日本の地でも働いておられる主をさらに渴望し、新しい2021年を迎えたいと思います。様々な宣教の働きが簡単ではない時ですが、このコロナを乗り越える神の愛と回復のために祈ります。

明石教会 <尹鐘憲 牧師>

2019年5月19日委任



大韓イエス教長老会(合同)から、日本へ宣教師として派遣され約2年前に明石教会に赴任しました。明石市は兵庫県神戸市の近隣にある海峡に面した古くからの地域なので、保守的な傾向の強いところで、福音伝道にとっては手強いところですが、しかし赴任してから韓国語教室、キムチ教室などの文化教室を通して教会の敷居を低くし、文化という器に福音を入れて「イエスが、キリストであること」を宣べ伝えることに最善を尽くしています。ところが、残念ながら、新型コロナウイルスによって、現在は文化教室の働きに多くの影響を受けていますが、再び伝道の機会を与えて下さる神様の恵みを期待しながら、姿勢を低くして神の時を待っています。また、主は我らの教会が、53年の歴史と伝統のある教会らしく、当然、地域社会のために主要な役割を果たし、地域福音化のために全力を出し尽くす課題をもって全信徒が常に徹底的に神さまの御言葉に注目し、熱心に学び、最善を尽くして神様の御国と教会のために仕えているので、いつかは、世の中の光と塩として教会の本質的な使命を果たしたアンティオキア教会のような教会になることを、期待しながら祈っております。今の明石教会は小さい教会ですが、一人ひとりの魂を神様の御元に帰らせる救いの箱舟として何よりも貴重に使ってくださることを信じ、明石教会の明日を、神様にお任せしつつ、今日も神様に向かって一歩一歩を進んでいます。

別府教会 <趙顯奎 牧師>

2019年5月5日委任



私は父の故・趙重來牧師の長男として小学校、中学校、高校を日本で卒業し、帰国してから神学を学んで牧師になり、大韓イエス教長老会(統合)から宣教師として派遣され再び日本に来て4年になります。今、仕えている別府教会は2018年11月から奉仕させていただいています。別府は海と山に囲まれたうつくしい所であり、さらに温泉で有名な所です。別府教会は

2000年11月、留学生のために建てられた教会であります。2020年11月に創立20周年を迎えました。今も、教会にはいろんな国から集まった留学生達があります。もちろん別府や大分に住んでいる韓国人や日本人の方もいらっしゃいます。こんな素晴らしい教会に導いて下さった神様に感謝します。感謝と謙遜な心を忘れずに任された使命をはたしていきたく思います。また、在日大韓基督教会の一員として働けることに感謝します。ここにも神の導きがあると信じ、在日、日本人、すべての人のために愛をもって仕えたいと思います。

家族は妻と、二人の娘(4才、2才)がいます。上の子は日本の幼稚園に通っています。妻と娘二人は、まだ日本語や日本の文化に慣れていませんが、早く慣れ親しみ、家族全員が宣教師としての使命をはたせるようお祈りをお願いいたします。

関西地方会

第3回女性教役者・長老との座談会開催

関西地方会女性部は第3回女性教役者・長老との座談会を2020年11月23日(月・祝)KCCで開催した。新型コロナウイルス感染が拡大するなか感染防止の観点で参加者はマスク着用、手指消毒液の設置や換気を厳守、また風邪症状のある方の参加自粛を呼びかけた。

今回は、「在日大韓基督教会に作られた固定観念」～固定観

念に気づき、打破するためには～というテーマで金必順牧師の(1)立ち位置を確認しつつ見えること、(2)教役者謝儀の格差、(3)教役者の資質の問題と『憲法(性善説)』。そして林芳子名誉長老の(1)女性会との関わり、(2)活動目標、(3)関西地方会女性部の歩み行事・学習会などの発題に対してそれぞれの意見を気楽に話し合った。中止する行事が相次いだ中で、遅らせての開催だったが参加者は有意義な時間をとらした。



特別寄稿

大阪教会創立100周年を迎えて

大阪教会 鄭然元 牧師

2021年は大阪教会が創立100周年を迎える年である。

100年前の1921年は大韓帝国が日本帝国に奪われ11年になる年で、多くの朝鮮人が日本に渡り始めた時であった。当時、神戸神学校に在学していた金禹鉉神学生と大阪難波攝津紡績工場の女工だった金義生と明石紡織紡績会社の申南秀(大阪教会尹浩信名誉長老の祖母) 姉妹との祈祷会により始まり、金成河氏宅の2階に伝道所が設けられた。当時大阪地域に住んでいた同胞の数は35,000人であった。礼拝場所は、金成河氏の家、ランバス女学院寄宿舎、プール学院等を転々しながら礼拝と伝道に力を尽くした。

1935年、創立15年になる年に、東成区大成通に教会堂の用意が出来36年間使用された。牧会者としては金禹鉉、朴尚東牧師(当時神学生)、初代の禹東哲、全仁善、朴命俊、李宗憲、崔正洙、金徳成、盧政一牧師に続き現在の鄭然元牧師は第8代目の委任牧師である。

教会の組織は1927年に第1回目の共同議会開催と教会学校が始まった。1931年夏期伝道集会を導いていた全仁宣伝道師(当時神学生)が警察に検挙され集会が中止されることもあった。1935年の共同議会においては姜喜錫長老が選出されて第1代目の長老となった。1945年の解放まで11名の長老と解放後は尹用道長老を始めに今日まで45人の長老が教会の治理と奉仕をしてきた。

第6代の金徳成牧師は1970年に赴任され、教会の建築のために土地を購入し、1978年に今日使用されている建物の建築を開始し翌年に完工された5階建ての建物の12階に愛信保育園を設立し、福祉事業を通して地域住民との交流と宣教の拠点としている。2020年大阪教会は登録教員577名、教会学校60名(教師を含む)、老人大学登録学生200名、教職者2名、視務長老12名、視務勸士20名、諸職159名が教会に仕えている。

毎日の早朝祈祷会をはじめ、主日礼拝は日本語礼拝(1981年から)と韓国語礼拝(日本語同時通訳)、献身礼拝、賛美礼拝、水曜祈祷会、聖書勉強を定期的に行っている。1985年に教会礼拝と音楽に大きな変化があったのは、パイプオルガンの設置

と、グロリア吹奏楽団が創団され今日まで活動している。

姉妹教会の結縁は、韓国の教会との宣教的連帯において非常に貴重な役割を果たしてきた。ソウルの鷺梁津教会(1981年)、釜山の楊亭教会(1988年)、浦項中央教会(2006年)、宣教協力教会としてソウルの麻浦教会(2003年)、済州の聖地教会(2016年)は、在日同胞教職者の神学、牧師訓練、日本への宣教師派遣をするなど重要な関係を持てたことはとても有意義である。

教会創立100周年のために2017年に教会創立100周年記念関連実行委員会を構成した。行事、記念事業に対する組織として、歴史編纂のための組織(冊子、電子冊子、アルバム、写真帳)、記念教会(国内外)設立、教会堂管理補修、宣教理念とビジョン文作成、姉妹・宣教協力教会関連事業、100歳になる人探し(在日、地域と共にする祝祭)、100周年記念聖書筆写、音楽演奏会、記念集会、本教会出身教職者招請(集会)など多様な行事を計画している。まずは最も重要な課題として、築43年になる教会建物の老朽化補修と地震対策工事を至急しなければならぬことである。

教会の主題は「100年の喜びと感謝を分かち合い、伝える年」であり、イザヤ61章2節を中心のみ言葉に次世代への信仰継承を教会の目標として主の福音を伝え、在日同胞と日本人、多様化されてゆく社会と時代の状況の中で、預言者的な使命と和解の共同体として、新しい100年に向けて邁進していく。100周年行事は、基本的な計画をもとに、コロナ感染防止のために、短期的行事は簡素化、非対面などを検討している。



青年会全協

第1回中央委員会開催 「祈りで一つになる」掲げ、前進



去る11月28日、29日の2日間にかけて、豊橋教会にて第1回中央委員会議が行われた。全協役員は「逆境をむしろチャンス」に捉え、全協という組織そのものを根本的に見直し、コロナの中でも歩める道を模索し始めた。気が付けば食事を取るときや、入浴した時でさえも、信仰に関し役員間で話せた時間は、喜びで満たされた時間であった。

去る11月28日、29日の2日間にかけて、豊橋教会にて第1回中央委員会議が行われた。全協役員は「逆境をむしろチャンス」に捉え、全協という組織そのものを根本的に見直し、コロナの中でも歩める道を模索し始めた。気が付けば食事を取るときや、入浴した時でさえも、信仰に関し役員間で話せた時間は、喜びで満たされた時間であった。

〈宣教委員会主催の「コロナ禍を乗り越え、ポスト・コロナ時代を展望するKCCJ」討論会主題講演〉

コロナ時代におけるKCCJ宣教の課題(下)

李元重 (京都南部教会協力牧師)

4. KCCJの宣教の課題 (つづき)

2) 信仰のテスト: 福音は我々の日常生活の中で生きているか

コロナ禍においては、我々の信仰も問われている。日本でも多くの教会が対面礼拝をオンライン礼拝に切り替え、対面礼拝が許される状況になってからもオンライン礼拝を並行している。今の状況で、非対面礼拝は礼拝ではないと定め、対面礼拝に強調点を置くよりも、オンライン礼拝を選択した人々も「霊と真理をもって」礼拝できるように助けるオンライン牧会を強化する神学と信仰が重要である。

実際にオンラインで礼拝できる技術や装備を持たない教会は総会や地方会、多少の余裕のある教会が積極的に支援すべきである。オンラインで礼拝する時もまことの信仰をもって礼拝できるように、礼拝指針や案内書などを作成して配布することも必要だろう。集まることができない時、オンラインでもまことの信仰生活ができるのであれば、自由に集まれるようになった時、なおさらそうすることができるのではないか。

コロナ禍で、人はより多くの時間を家で過ごすようになった。オンライン礼拝も、実質的に家庭で礼拝を捧げることが多い。つまり家庭が礼拝の聖所になり、家庭で我々の信仰をより明確に証することが要求されている。我々の信仰が、教会の囲いを超えて、家庭でも職場でも生きているものとして表れなければならない。

3) 希望のテスト: ビジョンの共同体(夢を見る共同体)になれるか

キリスト教的用語である「希望」は、夢や成長と同様、未来への期待や展望を意味する。筆者はここでそれを一般的用語である「ビジョン」という言葉と同じ意味で使うことにする。

KCCJはどのようなビジョンを持っているか。単に信徒の数が増えることは、教会の希望やビジョンにはならない。イエスは弟子たちを自分のもとに呼び、教える際、「神の国」というビジョンと希望を提示した。キリストの十字架の死と復活は、そのビジョンと希望がこの世のあらゆるものに勝ち抜くことを証明した。イエスの弟子たちは、そのビジョンに従ってキリストを宣べ伝えることができ、キリストのために死ぬこともできた。ビジョンがあるからこそ人が集まったわけで、人々が集まってビジョンが生まれたわけではない。

各時代と地域の教会は、「神の国」というビジョンを自分の時代と社会に適応し、具体化する必要がある。KCCJは1967年の第23回定期総会で宣教60周年を記念して「キリストに従ってこの世へ」という標語を掲げ、「教会に革新を、同胞社会に変革を、そして世界に希望を与える」という目標を設定した。当時、ごく小さい教勢であるものの、我々の先輩は急変している世界の中で、福音の意味を吟味しながら、そのようなビジョンを持って実践しようとしたのだ。その時と比べれば、今のKCCJにはそのようなビジョンがあるのか。ビジョンと夢がなければ、歴史の中の多くの教会がそうだったように、我々

今回の会議を通し我々は豊橋教会から言葉では表現できないほど多くのことを学んだ。特に豊橋教会の鄭守煥牧師任の全協全体に対するメッセージ、一般信徒はもちろんのこと、全協も対象となる主日礼拝の説教メッセージは自分たちが個のクリスチャンとしての姿勢を正し、クリスチャンとして霊的生活を維持する戦略を立て直す必要性に気づかされた。さらに礼拝が役員一人一人との対話形式で行われたことで、信仰における自分の負の側面に気づかされる感謝であふれ、信徒との温かい交わりの中で問題なく2日間を過ごせた。

2020年度 青年会全国協議会役員は、3つの共通する問題意識を持ち活動を始動した。今年からは今まで以上に困難な活動になることと考える。前が暗く見えにくい道を手探りで一歩ずつ進むのは、心身ともに疲れを覚えることと思う。しかし今年の全協の信条標語、「祈りで一つになる(豊橋教会:乾春紀代表、提唱)」を掲げ、常に役員全員が力強く前進する組織とすることを約束する。(報告:柳町聡総務)

も静かに消えていっただけだ。そのビジョンは、我々がどのような教会になるべきかという教会論、そしてこの時代にどのように伝道すべきかという宣教論の確立を意味する。

このようにビジョンを抱いて教会論と宣教論を確立するために、筆者は各教会が実践すべき三つのことを提案する。第一に、牧師の成長。第二に、平信徒の成長。第三に、歴史の保存と記憶である。現在KCCJのリーダーシップの多くは牧師にある。したがって、牧師の持続的な成長こそが、教会の新しい変化の糸口になる。しかし、それは牧師に、より多くの権限を与えるべきというようなことは意味しない。牧師は自らの成長を図るだけでなく、信徒の成長に努めなければならない。牧師は、聖書の御言葉と祈禱、人格的な対話、そして権限の委任を通じて、信徒が教会運営に関して主体性を持てるように仕えなければならない。この矛盾するような二つの命題が克服される道は、キリストの中で相互尊重と信頼しかない。最後に、歴史の保存と記憶は、今の状況を理解し、今後を展望するうえで必修的なことだ。各教会レベルで、週報、会議録、行事資料などを廃棄せずに、一つ一つ集めて整理することは、次世代のためにも必要なことであろう。



5. むすびに

コロナ19によって最も大きな被害を受けている国が、世界最強国とされる米国だ。その米国は2005年8月、「カトリーナ」という台風によって莫大な被害を蒙った。約1800人が死亡し、財産被害は1250億ドルと推算される。レベッカ・ソルニットはカトリーナの災害を調査研究する中で、人々の利他的な行動によって数千人の命が助かり、また利己的でデマに扇動された行動によって救える命さえ失ったことが分かったという。そして、このような災害が起こった地域には、ごく普通の人々が互いに心を開き、助け合う中で「災害共同体」というものが形成されるということがわかった(Rebecca Solnit, A Paradise Built in Hell, 2009)。彼女は言う「あなたが何を信じるかがあなたの行為を決める。あなたのその行為はあなた自身、または他人の生命を助けることも殺すこともできる。」

コロナ禍で生まれた世界で、我々は何を信じるか、我々はどういう行動するか。我々の行為はどのような結果を結ぶだろうか。このコロナ禍の中で人々は愛を必要とする。我々KCCJは非常に難しいテストを受けている。果たして我々はヨブのように「わたしを試してくださいませば/金のようであることが分かるはずだ」と告白することができるだろうか(ヨブ23:10)。

我々はいかなるものであれ、答えを出さなければならないし、その結果の責任を取らなければならない。